占い情報の受容と信用度の関連

Interrelation Between Acceptance Of Fortunetelling Information And Belief

福　田　茉　莉

問　　題

1．はじめに

今や占い情報は、朝の情報番組やインターネットなどで容易に取得できる。多くの女性誌が占い情報を掲載し、インターネットでも占いサイトが充実している。占い師の出版する書籍がベストセラーになり、女性雑誌は占いを特集号として刊行するとその売上が伸びる(種田、1998)。占いは産業として成り立ち、その市場規模は１兆円産業と言われる(『AERA 2003.11.3』)。

1998年にＮＨＫ放送文化研究所が全国の16歳以上の男女を対象に実施した意識調査では、全対象者の23%が慣習的に占いをし、おみくじをひくと回答している。各年齢層の区分によれば、16～29歳の間で対象者の43%が占いを慣習的に実施しており、年齢を増すごとに減少傾向にある。石川(1989)では大学生の約77％が本や雑誌の占い記事を「よくみる」、「時々みる」と回答しており、田丸・今井(1989)でも、対象者となった高校生の約30％が占いを「よくする」、「時々する」と回答している。学生を対象にした両調査では、占いの必要性についても調査しており、大学生の約38％（石川、1989)、高校生の約46％(田丸・今井、1989)が占いは世の中や現代に必要であると回答していることが紹介されている。これらのことから、占い情報はなんらかの理由で人々に取得されており、さらに人々が占いを必要としていると考えられる。

しかし、心理学や科学では占いを疑似科学として扱うことが多い。Eysenck & Nias (1982)は西洋占星術の妥当性について反証可能な部分を取り上げて検討した。結果として彼らの研究は、占星術における十二宮には妥当性がなく、現在のところ西洋占星術は迷信であるという結論に達している。さらに多くの文献においても占いは迷信や俗信として捉えられている(伊藤、1994、1995;Jahoda.G,1969)。俗信は「科学的な検証を経ていないにも関わらず、ア･プリオリに信じられている知識･技術･因果観」と定義され(野村、1989)、今のところ科学的な証明はなされておらず、非科学・疑似科学であるという立場から研究されている。

2．占いの役割

2－1．占いの信憑性(占いが維持されるメカニズム)

村上(2005)は占いが社会に浸透した主要因として、占い情報の信憑性とエンターテインメント性を挙げている。占いの信憑性を高める要因としては、占い情報に含まれるバーナム効果（菊池、1998)

や予言の自己成就（Gilovich,1991）が挙げられる。人々は占い情報に接した際、誰もが当てはまる文章に対して、自分固有の情報が言い当てられたと感じたり、占い情報に当てはまるように、日常の出来事や固有の情報を解釈したりする。このような情報の錯覚的な認知により占いの的中感が生じる。この的中感が、占いの信用度を高める要因となり、占い情報を取得する行為を強化させる。村上（2005）は、この占い情報における予言の自己成就現象とそれによってもたらされる占いの的中感を調査し、この的中感と占いの信用度に強い関連性があると述べている。

占い情報を取得する行為や占いの信用度が維持されるメカニズムとして、予言の自己成就現象を述べたが、村上・畦地（1996）は占い情報における予期と予期の確認傾向（positive feedback）の効果を考察している。予期と予期の確認傾向（positive feedback）の効果は、「ある信念と一致して『起こりうること』を予期し、それに従って新しい情報を探索し、解釈しようとする傾向」であり、予期の確認（positive feedback）過程は自己成就予言の過程とも言われる（池田、1993）。池田（1993）、村上・畦地（1996）、村上（2005）を参考に、占い場面に限定した予期と予期の確認傾向（positive feedback）の効果の構造を図のように推測する（図１）。占いへの信用度が高い者は、占い情報獲得後、占い情報を実生活に置換することで占い情報から実生活に起こりうることを予期し、実生活で起こった出来事を占い情報にあてはまるように解釈する。その結果、「はずれた」認識は薄く、不的中情報は無視するか、予言の自己成就的な解釈によって占い情報に的中感が与えられる。「あたった」認識が意識されやすくなり、既存の信用度はさらに強化され、維持される。

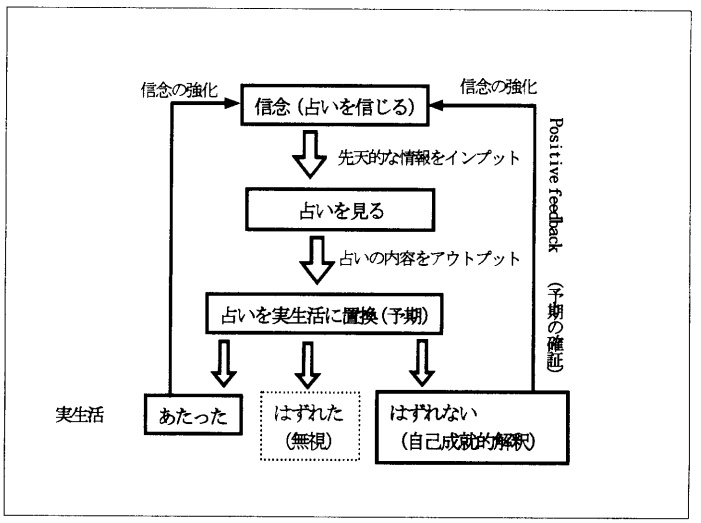

図１　占いにおける予期と予期の確認（Positive feedback）効果の構造

２－２．占い情報の取得要因

占いの信憑性に関係なく占い情報を取得する行為が発生する要因として、占いのエンターテインメント性が挙げられる。人々の占いへの興味や関心は高く、数多く存在するキャラクター占いや占いのランキング形式での提示など、占いをゲーム感覚で楽しむ機会が多くなっている。娯楽としての占いは、占いブームを形成する要因であると推測できる。占いの持つエンターテインメント性が現在のブームを支え、占いへの信用度に関係なく、占い情報に接する機会を与えている。

さらに菊池(1999)は、占いの価値は未来予測の正確性にあるのではなく、日常的な判断のよりどころとなる部分にあり、「自分を納得させ決断させる上での巧妙な責任回避システムとして働く」と述べている。また「人間関係の促進」や「心の支え」(田丸・今井、1989；村上・畦地、1996；村上、1998)として占いは機能し、自己情報収集のための手段の１つ(上瀬･緑川,1994)として活用されている。これらの諸側面が、占いが社会に浸透し人々に受容される要因であると考えられる。では、これらの諸要因と占いの信用度はどのように関連しているのだろうか。

３．占いへの信用度の個人差

先に述べたＮＨＫ文化研究所の調査結果において、16～29歳の年齢層における占いや易を信じる者の割合は全体の15％であり、占い情報を取得する行為の頻度よりも少ない。さらにAERAの意識調査では、調査対象者の60％が占いを信じると回答したが、その信用度に個人差が見られた(『AERA.2006.2.27』)。信用度の個人差は高校生を対象に行った調査からも読み取ることが出来る(『モノグラフ高校生 vol.71』)。つまり、占いへの信用度が高い者だけが、占い情報を取得し、全ての占い情報を受容している訳ではない。占いの信用度や占い情報の受容度には個人差があると考えられる。さらに人々は占い情報を取得した際、情報を取捨選択し、且つ占い情報の信用度を変動させているのではないだろうか。よって占い情報を取得する行為は一面的な占いの信用度から判断することは難しく、占いの信用度の低い者も占い情報を取得していると考えられる。

４．本研究の目的

以上の事から、占いの信用度と占い情報を取得する行為は必ずしも関連があるとは言えない。占い情報の取得行為が生起しない限り占いの信用度は生まれないが、占いの信用度が低い場合でも占い情報を取得している。さらに占い情報の選択的受容を考慮した場合、占い情報の取得行為と信用度が形成される過程は、占い情報取得段階と占い情報受容段階に区別され、占い情報受容段階は占い情報を日常に置換する段階と占い情報と実生活を対比し解釈する段階があると仮定できる。占い情報の取得段階と受容段階は異なり、段階による占い情報の役割や機能の変化する推測される。

しかし、これまで文献は主に占い情報の信憑性に着眼点をおき、その要因を検討し、一面的な信用度との関連を調査したものが多かった。だが、占い情報の取得や受容行為は占いの信用度に関係なく生じる行為である。占いが流行として普及し、社会に浸透する現状を捉える上では、占いの信憑性や占いへの信用度だけではなく、占い情報の取得に焦点を当て、占いが人々に果たす役割や機能を再検討する必要がある。

本稿の目的は占い情報をどのように捉え、実生活で活用しているか、面接法を用いて明らかにすることである。そのため、占い情報を取得する行為の発生を前提とし、占いへの信用度（信用―不信）の異なる２群に面接を実施する。両群の調査協力者に占いに関する意識や行動について質問し、得ら

れた発話内容から占い情報が果たす役割や機能に焦点を当て、分析する。その際、KJ法を用いてカテゴリー化し、それらの関係性と占いの信用度について検討する。さらに占い情報取得とその機能の変容を時系列で捉え、占いが俗信、迷信であると評価されている以上に、人々に受容されている現状を把握する。

方　　法

(1)　面接の概要

調査対象：ＮＨＫ文化研究所の調査において一番占いを信じる率が高かった16歳から29歳までの男女を調査対象者とし、友人や知人の知り合いに調査協力を依頼した。その結果実際に面接を実施した調査協力者は19歳から22歳の男女計６名であった。内訳は男性２名・女性４名である。

面接場所：面接場所は面接者に選択するように促した。よって場所は統一されていないが、BGMの小さめの人の出入りの少ない喫茶店を選択した。

面接項目：質問紙に答えるように指示し、質問紙の回答を基に以下の設問を含む半構造化面接を実施した。質問紙は田丸・今井（1989）の質問項目を参考に、研究目的に一致するような質問項目を新たに作成した。「占いを信じるか」・「占いはあたるか」・「どのようなときに占いを見るか」・「どのような占いを見るか」・「どのようなときに占いがあたった（はずれた）と感じるか」「占いが行動や感情に影響を与えるか」・「占いを覚えているか」・「継続してみている占いはあるか」など、調査協力者における占いの日常生活への関与や占いへの意識が把握できるような質問を構成した。回答形式は調査協力者の意見の自由度を高めるため、自由記述を多く採用した。

面接は１対１で行い、各調査協力者には発話内容をMDで録音する許可を取った。面接では上記の８項目に関する詳細な回答に加え、占いの的中経験やその他占いに関するエピソードを聞き取ることを目的に実施された。

面接日時：2004年２月から同年11月の間で、各調査協力者の都合のよい日に実施した。面接時間帯・所要時間は調査協力者により異なるが、所要時間は45分から80分であった。平均所要時間は約50分であった。

(2)　分析方法

質問紙調査：本研究で重視している８項目を含める質問の回答を抜き出し、一覧表を作成した。設問「占いを信じますか？」の２件法による回答から、暫定的に調査協力者を「占いを信じる群」・「占いを信じない群」の２群に分けた。

調査協力者の基礎データ

占いを信じる群（計３名）

事例１：Ｆさん　19歳　女性　フリーター

事例２：Ｔさん　22歳　男性　大学生

占いを信じない群（計３名）

事例４：Ｓさん　21歳　女性　大学生

事例５：Ｋさん　22歳　男性　大学生

事例３：Ｙさん　22歳　女性　大学生　　事例６：Ａさん　22歳　女性　大学生

発話内容の分析：まず、録音した発話内容からプロトコルデータを作成した。次に調査協力者がどのように占い情報を受容しているかに焦点を当て、占いに関する発話内容、特に面接内容で特記した８項目に関係する発話と占いに関する発話場面を抜き出した。調査協力者における占いの役割や機能面を析出する方法として、本稿ではKJ法を採用した。

さらにKJ法により析出された占いの機能と占い情報の受容過程を検討するため、事例ごとに発話内容を分析した。予期と予期の確認傾向の効果のメカニズムを参考に、占い情報の取得や受容場面は、占い情報取得段階と占い情報受容段階に区別され、占い情報受容段階は占い情報を日常に置換する段階と占い情報と実生活を対比し解釈する段階があると推測する。これらの段階を時系列に捉え直し、占い情報や占いの機能がどのように変遷するか検討した。

結果と考察

１．質問紙結果の分析

表１は面接開始前に実施した質問紙の結果を２群に区別し、表示したものである。占いを信じる群（以下：占い信用群）・信じない群(占い不信群)に区別して一覧表を作成した。両群を比較すると、占い信用群では各自が占い情報を取得することによって行動に変化が生じると回答したが、不信群で

表１　質問紙結果一覧表

質問内容	被験者					
	占いを信じる			占いを信じない		
	Ｆさん(19･女)	Ｔさん(22･男)	Ｙさん(22･女)	Ｓさん(22･女)	Ｋさん(22･男)	Ａさん(22･女)
どのような占いを見たことがありますか？（該当数を明記）注視占いの有無	10種類 ○　星座占い	11種類 ○　動物占い	4種類 ○　星座占い 血液型占い	5種類 ×	3種類 ×	11種類 ×
どのような手段で占いをみますか？（該当数を明記）	6種類	4種類	2種類	3種類	2種類	4種類
どのようなときに占いをみますか？	気づいたとき テレビがかかっているとき	自分について考えたい時 暇な時 他人のキャラクターについて考えたい時	毎朝見る	雑誌を読んだ時 その日の運勢が気になったとき 暇な時	雑誌を買って載っていた時 放送が目に入った時	偶然やっていたら気が向いたら
占いがあたっていると思う時はどんなときですか？	「やってはいけない」と書かれたこと・言われたことを無意識にやってしまったときに「これか。」とすぐに思ってしまう。	占いの内容が、その人の性格をよく言い表しているなと感じた時	占い通りにいいことがあったとき	占いで書かれた事と同じことが起こった時 性格が「その通り！」って思うほど言い当てられたとき	その日の良し悪しが占いの良し悪しと一致した時	自分がそうだ(あるいはそうかも)と思っていることが書いてあった(見た)とき
占いがはずれていると思う時はどんなときですか？	「いいことがある」と書いてあって、実際のところなかった時	「今日の占い」などで「赤いハンカチがラッキー」などどうでもいい事を言われた時	良いと書いてて悪かったとき	何かが起こると言われて、その通りにならなかった時	上と逆の時	自分がそうでもない(かも)と思っていることが書いてあった(見た)とき
占い内容の記憶の有無	○	○	○	○	×	○
占い内容における感情の動向の有無	○	○	○	×	×	○
占い内容における行動変化の有無	○	○	○	×	×	×
占いはあたると思いますか？	はい	はい	いいえ	いいえ	いいえ	いいえ

は行動の変化は生じなかった。また、「調査協力者ごとに特に注目していると考えられる占い」(村上、1998：以下「注視占い」) が占い信用群には各自存在し、特定の占いを継続的にみる行為が発生したが、占い不信群に「注視占い」の存在は認められなかった。しかし、占い信用群であるYが「占いは当たるとは思わない」と回答し、さらに不信群のAが占い情報により感情の変化があると回答している。これは占い情報の取得行為と占いの信用度が必ずしも一致しない結果である。

また占い不信群にも占いの的中経験がみられ、逆に占い信用群にも占いの不的中経験があった。これは「占い」と聞いて調査協力者の意識に連想される占いは「注視占い」だけではなく、その他多数の占いが存在することの反映であると同時に、占いへの高い信用以外にも占い情報を取得する要因があることを示している。つまり人々は、占いを信じているから占いをみる、もしくは占いを信じていないから占いをみないというわけではない。占い情報を取得する行為を支えるものは占いの信用度や信頼だけではなく、その他の要因が複雑に絡み合っているのではないだろうか。さらに占いの信用度は「注視占い」とその他の占いでは異なり、情報内容によっても変化する。よって信用度は連続的で流動可能な概念であると推測される。

2．発話内容の分析

2－1．占いの役割と機能

KJ法を用いて発話内容を分析した結果、調査協力者の占いへの役割期待や機能は以下のようにまとめられた。6つのカテゴリーが抽出され、占い情報を取得する行為や占い情報がもたらす機能は①娯楽機能、②コミュニケーション・ツール機能、③人間関係の促進機能、④精神安定機能、⑤行動指針機能、⑥気休め機能であった(表2)。以下の文章は発話内容から抽出された占いの機能とその構成要素についての説明である。以下の文章及び表2において、特定のアルファベットは調査協力者を表し、[　]は発話例を表す。

表2　占いへの役割期待と機能

占いへの役割期待と機能	発話者※	発　話　例
娯楽性		
①娯楽性	F(○)	楽しいやん
	A(×)	(占いの)内容よりも順位が気になる
②コミュニケーション・ツール	Y(○)	動物占いはブームだったから
	S(×)	友達が学校に占いの本を持って来てて、休み時間にみんなで
不確定性の低減		
③性格の把握	T(○)	占いで他人の性格を知るのが目的
	K(×)	自分で気付いていない自己を見つける
④精神安定	Y(○)	(占いに)そう書かれてるから、気持ち的に今日は大丈夫かなって。
	A(×)	(占いに)言われたらそうかもって。で、安定したいんかな。
⑤行動指針	F(○)	それ(悪い占い情報)に対しては対応策を練る
	S(×)	後押ししてほしいだけ
気休め		
⑥気休め	Y(○)	占いをみてたら悪いことが起こっても占いのせいにできるんやと思うわ
	S(×)	占いで多少テンション上げる。でもすぐ忘れる

※ 表2の発話者の記号は○を占い信用群、×は占い不信群を示す

娯楽性

娯楽性には①娯楽機能、②コミュニケーション・ツール機能が含まれる。［おもしろい］、［楽しい］、［友達と一緒に占いをした］など、遊びやエンターテインメントとして占いは利用されている。この占いの娯楽性は田丸・今井（1989）の調査と一致した結果である。さらに本稿では、娯楽性の一側面として、［（占いのランキングが）1位かどうか気になる］など、調査協力者がランキング形式で提示される占い情報を一種のゲームとして扱っている場面が得られた。また［流行っていたから学校で。教室で友達みんなと占いをした］など流行や話題性の観点から、他者とのコミュニケーションの一環として機能していることが明らかになった。占いの娯楽性や話題性は占いの信用度に関係なく、占い情報を取得する動機付けとして作用していると考えられる。

不確定性の低減

不確定性を低減する機能として、③性格を把握する機能、④精神安定機能、⑤行動指針機能が含まれる。これらを全体的にまとめると、占いは日常生活や人間関係に関する漠然としたものになんらかの納得した答えを導き出すために使用されることを示している。

③性格を把握する機能には自己認識、他者認識、さらに相性を含めた性格判断を示す発話内容をまとめた。自己認識には［自分を知りたい］という発話が代表的であり、［自分の知らない新しい自分を発見する］という意見が得られた。［誰だって自分の事知りたいやん。自分がどんなんかな？とか。自己意識を自己確立したいんじゃないかな？］や［（占いで）自分に向いているって言われた事をその気になって好きになるっていうのが結構ある］と発話され、占い情報で自己を認識、固定する傾向が見られた。他者認識についても同様に、自分の知らないもしくは曖昧な他者の情報を得るために占いが用いられ、他者の性格を把握する手段となっていた。［他の人はどうかなって把握して、自分なりにその人のイメージを作る手がかり］となり、さらに相性の診断結果から自分の立ち振る舞いを決定していた。また調査協力者の中には、特定の他者の性格を把握する以外にも占い情報そのものに関心を持ち、［占いから多様な人間性を学ぶ］と発話した者もいた。占い情報により自己や他者が認識しやすくなり、さらには性格や個人を規定する要因となる可能性が見られた。

④精神安定機能には何らかの不安や迷いを抑制し、安定を得ることを期待するものである。自発的に占い情報に接し、何らかの問題に伴う不安や迷いを低減する手段として占いが機能している。調査協力者の1人は失恋時において占い情報を取得し、［この人ではなく、次の人が運命の人である］という情報から、［本当に自分はその人の事、好きやったんかな？違ったんちゃうかな］と失恋時のショックを次に現れる運命の人を想定する事で視点を変換させている。また［試験日に占い情報がポジティブな情報であれば、テンションが上がる］と発話されたように、占い情報はネガティブな事象に対する感情をコントロールし、ポジティブな感情を喚起させるために意図的に受容されている。占い情報を受容することは、個人にとってネガティブに認識された対象・事象をポジティブな対象・思考に転換する手段となっていた。さらにラッキーアイテムを所持することで不安感に対処する者もいた。

⑤行動指針機能は問題解決のための参考や未来予測として占いが機能していることを示す。占い情報は今後の行動選択や決定の手段として活用されていた。占い不信群は［(占い師に言われたことは)アドバイス的に捉える］と発話しているが、信用群は［(占い情報から) 悪い内容に関しては対応策を練る］と発話しており、占い不信群は参考程度にしか扱わないが、信用群は情報をそのまま受け取る傾向がみられた。また占いの信用度の高い者が［占いは未来を予知するものである］と発話しており、積極的なラッキーアイテムの所持や運を好転させる行動の遂行がみられた。つまり、占い情報から今後(近い将来)経験するだろう体験を予期しておき、現実場面で対処する手段として作用すると考えられる。この点は、占いをみる行為は「基本的に、なにがしかの情報(兆)を捉えて、未来の状況(果)を予測する行為」であり、占いが自己の物語製造装置として作用することを述べた多くの文献と一致する(鈴木、2004；板橋、2004；芳賀、1994)。

気休め

「気休め」は占い情報取得時の一時的な安心を指す。占いには不安や迷いを低減するだけではなく、満足感を与える機能がある。この機能は「精神安定」と独立である。なぜなら⑥気休め機能は、占い情報に関係なく、占い情報を取得する行為そのもので得られる安心感を指す。両群共に[とりあえず(占いを)みたい]という発話が多かったが、占い不信者では占い情報の記憶がないにも関わらず、[いいことは信じる。悪いことは信じない。]や［良い占い情報が得られるように占いを梯子する（1日に何種類か見る)］と発話することから、占い情報の正確性に関係なく、自分にとってポジティブなもの、もしくはポジティブに変換できるものだけを選択的に取り入れる姿勢がみられた。ポジティブな占い情報を積極的に受容し、情報取得時に発生するポジティブな感情を楽しむために占い情報を取得する行為が生起していた。また信用群では、[占いをみたらちょっと占いのせいにできる]と発話する者がおり、これは意識的なセルフ･サービングバイアスであると考えられる。セルフサービング・バイアスは、課題遂行などの結果を自己にとって好ましい意味を持つように、解釈、説明する傾向を指す。さらに物事に対する失敗を課題の難しさや運といった外的要因に帰属させる傾向を自己防衛バイアスと呼ぶ（藤島、2001)。本稿でも占い情報にこのような自己防衛の効果を期待した自発的な占い情報の収集が行われていた。[占いをみてたら悪いことが起こっても占いのせいにできるんやと思うわ]という発話はこのバイアスの典型であり、調査協力者にとってネガティブな事象が生じた場合、ネガティブな占い情報を想起することは、「運が悪かったから、仕方がない」とネガティブな事象の発生原因を外部に帰属させる手段であった。運や運命を知る手段として占い情報が用いられ、ネガティブな占い情報とネガティブな事象に架空の因果関係を想定することによって、運や運命に原因を帰属する。そのためには占い情報を取得する必要があり、それ故、占い情報は自分に対する保険として維持されると推測できる。

2－2．占いの機能と占いの信用度の関連

占いの信用度を基とした2群間による発話内容の違いは、占い情報をどのように受容しているかではなく、占いをどのように認識しているかという違いであった。つまり、各自の持つ占いのイメージが肯定的か否定的かによって、信用度に違いが見られた。占い不信群の調査協力者は占いそのものに対して否定的に認識していた。その根拠として［占いは科学的根拠がない］といった占いの非科学を指摘する発話や［占いを本気で信じてる人って怖くない？］などの社会的偏見が含まれる発話があげられる。調査協力者の発話内容は自発的思考よりも社会規範の同調による姿勢が多く見られ、外的要因に起因したものが多かった。また[信じたくないから信じない]など、高い信用度の裏返しとも取れる発言をする者もいた。否定的根拠の外部への帰属、もしくは信用度の高い自分を否定する理由づけとして「信じない」と回答した場合があり、信用度は常に変動する可能性を秘めていると考えられる。他方、占い信用群では、[占いで運命が分かる]という法則体系がみられた。これらは主に「注視占い」に関して言及されたものが多いが、[雑誌の占いも自分と同じ星座の中の誰かは、ピッタリ当たってる人がいるんやと思う]と占いに自分の人生が書かれていると発話する者がいた。さらに[占いは自分にとって絶対的である]や[自分の生活に必要]という発言もみられた。占いに運命が記されていると捉えているため、疑いなく占い情報を受容している。積極的な占い情報の取得や占いへの依存傾向がみられた。

図2は上述した占いの機能と占いの信用度の関連を示したものである。図2では円を2つ作成し、それぞれ占い信用群・不信群と規定した。2つの円が重なり合う部分は、両方の群において抽出された機能を示している。娯楽性、不確定性の低減、気休めについては占い信用群・不信群の両群において発話された機能面である。しかし、娯楽性は「暇だったので」「おもしろい」など、発話内容から占い情報への信用性に関与していないため、円の中ではなく外に配置した。占いへの不信は占い不信群のみ、占いへの信頼は占い信用群

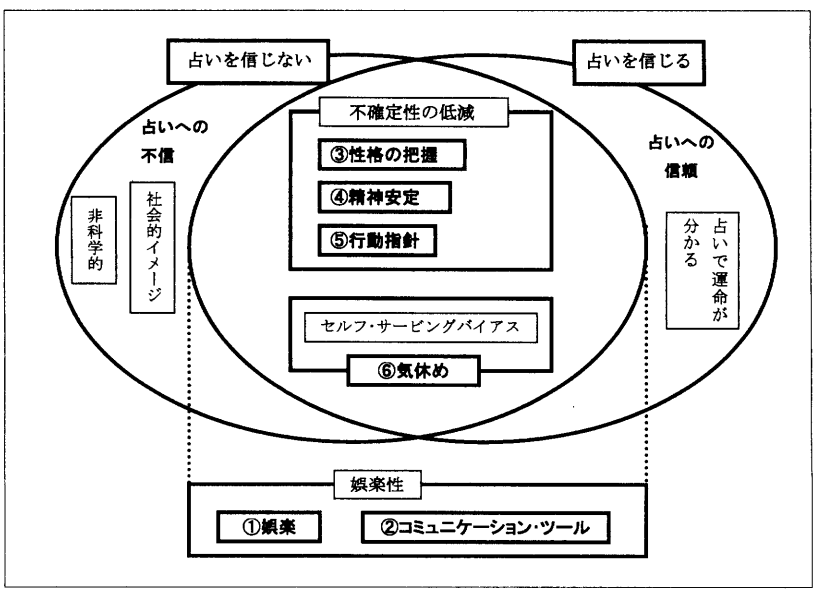

図2　占いの機能と信用性

にのみ発話されたカテゴリーであったため、互いに重なり合わない円の中に付置した。調査分析の結果、本稿では占い情報は①娯楽機能、②コミュニケーション・ツール機能、③性格を把握する機能、④精神安定機能、⑤行動指針機能、⑥気休め機能として活用されており、占いの信用度に関係なく析出された。

3．占い情報の受容過程と信用度の変動

占い信用群・不信群では、信用群の「注視占い」についての発話内容以外には大きな差は見られなかった。また、不信群にも占い情報を選択的に受容する傾向が見られた。調査協力者は[いいことは信じる。悪いことは信じない]や[自分がそうだと思った内容(占い情報)は当たっていると思う]など、自己に都合の良い占い情報を取得していた。都合の悪い情報に関しては占いの不信用性を再認することで情報の受容を回避した。また占い情報を自発的に取得しているにも関わらず、占い情報に興味のない者もいれば、自分に都合の良い情報は受容する者もいる。つまり、自己のニーズに沿った占い情報は受容し、自分なりに解釈していることを示している。よって占い情報への信用度は対象となる情報内容に左右され、流動性があると考えられる。

以下では、信用度の個人差と占い情報の受容に焦点を当て、占いの機能がどのように変化するか時系列を用いて検討する。時系列を軸として分析するにあたり、占いにおける予期と予期の確認（positive feedback）傾向の効果（池田、1994・村上、1996）にとって重要となる時点を検討し、さらに占いが物語作成装置であるという多くの見解（芳賀、1994・鈴木、2004・板橋、2004）から、占い情報の取得と「占い情報を実生活に置換する」行為を時系列中に取り入れた。本稿では特徴的な3つの事例を用いて占いの機能の時間的変遷を説明する(図3)。

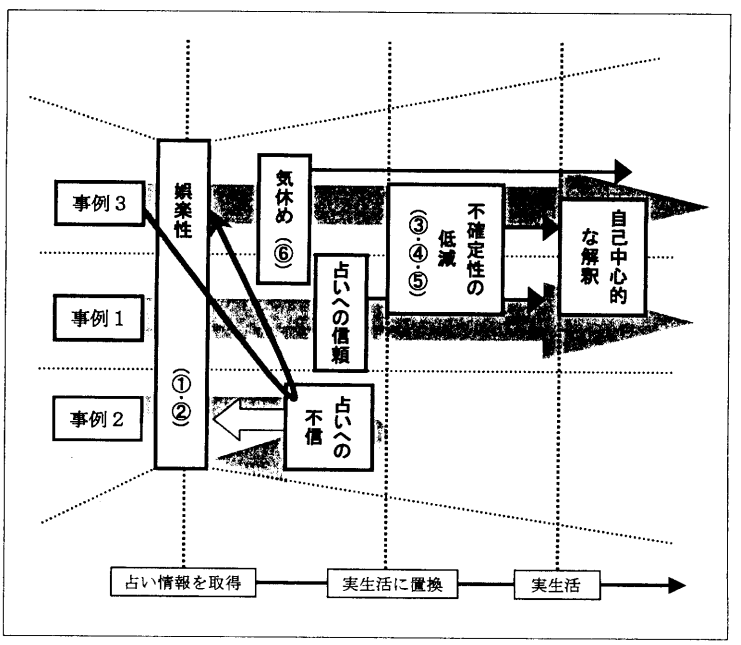

図3　占い機能の時系列変化

事例１）Ｆさん：占いの信用性が高い者

Ｆは特定の占い師に高い信頼を寄せており、注視占いにも占い師と星座占いを挙げている。他の調査協力者と同様に[占いは楽しい]と娯楽性に関する発話内容が見られたが、[友達が見てるのは興味本位] と述べ、友達は興味であるが自分は違うといった自負のようなものが伺える。また、[あの人の占いは絶対当たるから、信じてしまう]や[あの占い(星座占い)当たりませんか？] と占いの信用度が高く、的中経験もみられた。もっとも、こうした真剣さは「注視占い」に限定した発話であり、他の占いに関しては [暇つぶし] で見ることもあり、占いの絶対性と娯楽性は本人の信用する占いの種類によって区別されている。

Ｆにとって「注視占い」は自分の運命を知る手段として、現実生活と密接な関わりを持っている。Ｆは [(自分の未来を) 教えてほしい] と占いは未来を暗示するものと捉えており、未来を知る為には占いは不可欠であるといった重要性がみられた。さらに [占いで対応策を練る。恋愛運が悪いって言われたら、彼氏とは連絡を取らない] という発話からも、占いを基に未来の生活の擬似的な物語を作成していると考えられる。これらの発話は占いが絶対的な存在として機能しており、占い情報をそのまま受容することを示している。しかし、占い情報と生起した出来事が一致しなかった場合、占いの絶対性と現実生活とのズレを埋める為に解釈が自己中心的になる。Ｆ自身も [それ（占い）に合わせて信じてしまった感がある] と発話しており、予言の自己成就により占いが「あたった」という偏った認識が発生し、占いに対する信用と依存傾向が増す。このように占い情報に対する共感率が高くなり、占い情報をそのままの形で意識内に取り込みやすくなると考えられる。Ｆは娯楽として占いに接するが、信用性が高いため占い情報をそのまま受容し、占い情報を実生活に置換した後、占い情報を基に実生活を解釈していた(図３では中心の領域がＦの占い情報の時系列変化を示す)。

事例２）Ｋさん：占いの信用度が低い者

Ｋは[中学生の時なんかは占い信じてみてましたけど、今は目に付いたらみる感じです]と述べ、占い情報が感情や行動に影響を与えることはないと回答した。[占いは非科学的である]と占いの信用度を低く、占いの信用度が高い友人に対しても[占いを根拠にして、占いで自分の道を決めてしまっているのはちょっと良くないんじゃないかな]と発話している。このことから、占いの信用度、情報受容が共に低いことが分かる。[昔はすごくみていたので]と占い情報の取得が習慣として継続しており、その理由も[好奇心]と述べている。他の調査協力者と同様に、占い情報の取得は占いの娯楽性を導入口として発生するものの、占いへの不信を認識することにより、占いの果たす機能は娯楽面に制限される。占いの不信によって、現実生活を占い情報にすりあわせることはなく、実生活に置換されることはない。よって、娯楽性や話題性など情報の一種として占いを利用するが、その他の機能は生起されない（図３では１番下の領域で示す)。

事例３）　Ａさん／Ｙさん：占いの信用度に変動がある者

本稿の目的である「占いを信じない人」をも考察するにあたって、占い不信群の調査協力者の中で、「占いは信じないが占いをみるという行為が発生し、占い情報が感情や記憶に影響を与えることがある」というような回答をする調査協力者がいた。逆に、占いを信じているが的中するとは思っていないと回答する者がいた。該当する調査協力者は［いいことは信じる。悪いことは信じない］や［都合のいいことは信じる］など、信用性に対する曖昧な発話があり、信用性は情報内容や個人の状況により流動性があると考えられる。本稿では占いの信用性が低いと回答したAと信用性の高いYの発話場面を取り上げる。

Aは[暇潰しに(占いを)見る]と回答した。Fの注視占いに対して、Aも同じ占いをみると回答したが、[偶然みるだけ。気が向いたらみる]と述べた。[うれしい事は信じる。ショックなこと言われたら信じひん]と回答し、Aには占い自体の信用性に関係なく、信用する情報と信用しない情報が存在した。これは占い情報によっても認識は変化し、「占い情報が良ければ信じる・占い情報が悪ければ信じない」など、内容の二分法的理解がなされることが多いという指摘（村上、1998）に一致する結果である。またYも[気になる雑誌があればその雑誌の占いは全部読む。内容は全部違うから、その(それら)雑誌のいい部分を全部拾ってきて、いい部分だけ信じて生きてる]と、占い情報の選択的受容場面を述べている。占いの信用度が高く、[(占いの)期日が終わるまではあたるかもしれへんって可能性を持ってる。いいことあるんちゃうって期待する部分がある]と回答したが、Fとは異なり[占いを基本的には信じているが、100％信じているわけではない]と述べ、[めっちゃ信じてたら、悪い事言われた時に、その人(占い師)のせいにできひんし、曖昧な方が自分の行動を占いのせいにできる]と信用性の個人差が見られた。また、［占いをみてたら占いのせいにできるんやと思うわ]や[悪いこと起こったら占いに悪いこと書いてあったからって。自分のせいでもちょっと自分のせいを半減するというか]と回答した。これは自分に起こったネガティブな事象に占い情報を組み込んで実生活を解釈していることを示す結果である。

このように事例３では、[暇潰し]や[楽しい]といった占いの娯楽性が占いを見る動機づけとして存在するが、占いへの不信を認識する場合と、不信感は無視して占い情報を受容する場合に分かれる。この取捨選択については、Aにおいてはポジティブな占い情報であったが、Yにおいては自己のニーズに適した情報と言える。占い情報の取得後、情報を選択的に受容し、不要な情報に対しては占いの不信を認識することで排除し、役に立つ情報に関しては再認するという過程を辿ると考えられる。これは占いの信用度が低い者にも同様であり、占い情報にその信用性は左右されると予測できる。

総合考察

１．占いの機能

占い情報を取得する行為を促進する要因として、本稿では娯楽性、日常生活や人間関係、自己に対

する不確定性の低減、気休めを挙げた。占いにはエンターテインメントとしての側面があり、さらに不確定性の多い場面に占いが情報収集手段として用いられることは多くの文献と共通する結果である。占いは日常生活に充満している多くの不安や迷いに希望や期待、なんらかの意味を与えるものである。物語を製造するという心的行為に関しても、運や運命に沿った未来予測をすることで実生活に生じる事象の対処方法を構築し、未来に対する不安を低減させるものであった。さらに占い情報と占い本来の持つ曖昧さの間で自己中心的な解釈をすることにより、占いは自己防衛の１種として機能していた。これは占いにおける予期と予期の確認（positive feedback）傾向の効果を確認するものであり、占い情報を取得することによるセルフサービング･バイアスの効果も示唆された。

また占いの娯楽性は占い情報を取得する動機付けとなり、占い情報の日常生活への浸透を促進させていた。占いの娯楽性が導入口となり、信用度の低い者でも占い情報に触れる機会が多いことが示された。占いが気休めとして機能する場合は、占い情報の正確さではなく、占い情報を取得する行為そのものに焦点が当てられており、行為の発生に意味を置く者もいた。これは占い情報を取得する行為が信用度に関係なく継続する要因と考えられる。

２．占い情報の選択的受容と信用度の変動

本稿では信用度を、信用・不信の二分法的な扱いをしたものの、発話内容を分析した結果、占い情報の信用度には流動性があることが示唆された。調査対象者は信用度ではなく個人差によって、情報内容により受容する、または無視するという情報選択を行っていた。さらに占いの信用度そのものが曖昧な場合があり、自己のニーズに適した情報やポジティブな情報に関する占い情報の受容場面がみられた。事例3に見られるような占い情報の捉え方は、占いの信用と不信の両意識を持ちつつ、時間経過的な結果として占い情報の選択的使用と自己中心的な解釈をするところに特徴がある。なぜそのような情報の選択的受容が発生するのか。

伊藤（1994）は、科学も非科学も私たちの世界を説明する上では等価であり、価値観を伴った物差しで計らなければ正誤の判断はできないと述べている。つまり、占いを絶対的に信用する場合、占いは世界を把握する最良の手段であり、科学の限界を主張する。逆に科学を信奉する人にとっては、科学で解明することが世界を把握する最良の手段であり、占いは非科学だと主張する。では占い情報を選択的に受容し、情報により信用度を変化させている彼らの存在はどう位置づけられるか。これまでの展開から、彼らは占いの非科学性を認識しながらも、占い情報を実生活に置換していると推測できる。都築・阿部(2001)は、占い師に鑑定を依頼する行為を新たな価値観の獲得と考察している。占いごとに異なる診断結果は各々価値観として存在し、占い情報の受容は自己内で選択可能な価値観となる。占いの信用度は、情報そのものの価値判断に基づき変動すると考えられる。占いがもたらす情報は非科学や疑似科学の視点よりも、実生活に役立つ情報として受容される傾向にある。

3．今後の課題

これまでの研究は占い情報の信憑性や信用度が形成される要因に焦点を当て、占いを信じる・信じないという二分法的な視点から研究が行われていた。しかし本稿の結果から信用度は可変的で流動性がある概念である可能性が示唆された。さらに信用度に関連のない占い情報の受容過程が明らかになった。人々に普及する占い情報が占いへの信用－不信という二分法的な解釈では説明できず、信用度に関係なく情報が受容される場合があることを提唱したにすぎない。今後さらに占い情報を取得する行為に焦点を当てて研究する必要がある。本研究の結果から考察するように、占い情報や信用度の違いにより、各々にとって占いが果たす機能はさらに変化するだろう。

また、占い情報を取得する行為は情報提供側と占いを見る人の相互作用によって生起される行為である。占いとは情報提供側の意図と行為者の意図の一致により成立すると考えられる。しかし本稿では占い情報の取得側に焦点をあてており、情報提供側についての考察はしていない。占いという社会現象を捉えるにあたり、この二つの視点からさらに研究する必要がある。

謝　辞

本稿は、立命館大学文学部2005年度卒業論文研究の一環として行われた研究結果を独自にまとめ直したものである。卒論研究時に御指導いただいた立命館大学文学部サトウタツヤ教授をはじめ、オルタナティブオプション研究会やサトゼミの皆様に深く感謝いたします。

引用文献

Asahi simbun weekly AERA　2003.11.3. 12-17.

Asahi simbun weekly AERA　2006.11.3. 46-52.

浜島幸司　2004　3．占いを信じるか　深谷昌志監修　2004モノグラフ・高校生VOL.71「科学技術社会の中の高校生 －「メカ」社会における「ナマ」へのあこがれ－」9- 11. ベネッセ未来教育センター

H. J. Eysenck and D. K. B. Nias 1982 ASTROLOGY: SCIENCE OR SUPERSTITION? 岩脇三良・浅川潔司（共訳）1986 占星術―科学か迷信か 誠信書房

堀野　緑・上瀬由美子　1994　青年期における自己情報収集行動　教育情報研究10.2.55-62

芳賀学　1994 少女たちの物語製造装置・占い 大航海、1,67-72.

池田謙一　1993 社会のイメージの心理学 －僕らのリアリティーはどう形成されるか－ サイエンス社

板橋作美　2004 占いの謎 いまも流行るそのわけ 文春新書

伊藤哲司　1994　血液型判断と信じる心　現代のエスプリ、324,106-113.　至文堂

伊藤哲司　1995 「俗信を信じる」ということ 茨城大学人文学部紀要、28,25-56.

Jahoda. G. 1969 The psychology of superstition. 塚本和明・秋山庵然(訳)　1979　迷信の心理学　法政大学出版

川喜田二郎・牧島信一 1970 問題解決学―KJ法ワークブック―　講談社

菊池　聡　1998 予言の心理学 KKベストセラーズ

菊池　聡　1999 超常現象の心理学 人はなぜオカルトにひかれるのか 平凡社新書028

ＮＨＫ放送文化研究所（編）1998　現代日本人の意識構造[第５版]　ＮＨＫブックス

野村　昭　1989　俗信の社会心理　頸草書房

村上幸史・畦地真太郎 1996 信じる、行動する、だから当たる －占いに関する信念とバーナム効果－ 第37回日本社会心理学会大会論文集、178-179.

村上幸史　1998「ツキの流れ」は占いで読む?!―運に関する信念における占いの情報的影響－　第39回日本社会心理学会大会論文集、232-233.

村上幸史　2002　断定、仮定、命令?!―占い文章の構造と運命観・運勢観－　第43回日本社会心理学会大会論文集、 232-233.

村上幸史　2005 占いの予言が「的中する」とき　社会心理学研究21(2),133-146.

鈴木淳史　2004　占いの力　洋泉社

種田博之　1998　新しい占い空間とその影響　関西学院大学社会学部紀要、81,105-115.

田丸敏高・今井八千代　1989 青年期の占い指向と不安 鳥取大学教育学部研究報告 教育科学、31,1 225-260.

T. Gillovich　1991 How we know what isn't so: The fallibility of human reason in everyday life, Macmillan. 守　一雄・守　秀子（訳）1993　人間この信じやすきもの　迷信・誤信はどうして生まれるのか　新曜社

都築舞子・阿部耕一郎　2002 再生される世界―「占い」と「占い師」をめぐる一考察― 広島修大論集 人文編42,2 333-351.

露木まさひろ　1993　占い師！ココロの時代の光と影　社会思想社

藤島喜嗣　2001 セルフ･サービング･バイアス 山本真理子・池上知子・北村英哉・小森公明・外山みどり・遠藤由美・宮本聡介(編) 社会的認知ハンドブック pp198-199. 北大路書房